

平成 26 年度

自己点検・評価書  
(学校評価報告書)

附属平野小学校

## 1 附属平野小学校の現況

### (1) 学校名

大阪教育大学附属平野小学校

### (2) 所在地

大阪市平野区流町1丁目6番41号

### (3) 学級数・収容定員

18学級(1学年3学級) 収容定員690人(1学級40人・ただし1～2年生は35人)

### (4) 幼児・児童・生徒数(3月16日現在)

670人(男子337人・女子333人)

### (5) 教職員数(3月16日現在)

校長(併任) 1人、副校長 1人、主幹教諭1人、教諭 26人(うち、養護教諭1人、栄養教諭1人、病気休業2人、任期付教諭3人)、非常勤講師 4人、スクール・カウンセラー 1人  
事務職員 3人(専任1人、事務補佐員2人、臨時用務員(用務員)2人、臨時用務員(調理師)4人)

## 2 附属平野小学校の特徴

本校の特徴は、一人一人が自立し、生涯にわたって自ら学び続け、周りの人と協力しながら、最後までねばり強く、21世紀の社会を創造する力を備えた子どもを育成することにある。

そのためには、「確かな学力」を培うとともに、自他を尊重し、多様さを認め合い、自他の生命を尊ぶ「豊かな人間性」を育むことが必要である。

## 3 附属平野小学校の役割

- ① 義務教育学校として、児童の心身の発達に応じた初等教育を実践する。
- ② 教育実習の実施校として、教育実習の指導にあたる。
- ③ 教育研究の推進を図るため、大阪教育大学と密接な関係を保ちつつ、実証的な研究を行う。また、教育の成果を発表し、わが国の教育の発展に寄与することに努める。
- ④ 国の「拠点校」、地域の教育の「モデル校」として寄与する。

## 4 附属平野小学校の学校教育目標

「ひとりで考え ひとと考え 最後までやりぬく子」

- 「ひとりで考え」…知的好奇心に基づく主体性

進んで問題を発見し、その解決に向かって深く考えていこうとする自発的な構えをもつ子どもの姿。どのような物事に対しても、そのものにしかない良さ、面白さ、楽しさを見出そうとし、主体的に考え、判断し、知る・発見する・創り出す喜びを体得し、学習の成就感を味わうことのできる子どもの姿。

○ 「ひとと考え」…支え合う協調性

矛盾したり、対立したりする考えを出し合い、みんなで練り上げることからより高い知識を創造しようとする子どもの姿。友だちと力を合わせて考え、人との関わりを豊かにする中で、友だちや様々な人々とともに活動することに喜びを感じ、互いに高め合うことができる子どもの姿。

○ 「最後までやりぬく」…自己実現に向かう創造性

目的・目標を達成するために、様々な工夫を加えながら創造的にねばり強く追究していく子どもの姿。過去の経験に依存したり、お手本の通りに仕上げたりするのではなく、よりよい方法を考え、個性を發揮し、自分なりのものを創り上げていく子どもの姿。

## 5 附属平野小学校の学校教育計画

### 1、一人一人を大切に学習の中で、確かな学力を育成する。

私たちは、「楽しく、充実感のある」授業や教育活動を通して、一人一人の子どもたちの良さや可能性を伸ばしていくことを学校教育の最大の目標としている。そこでは、私たちは、知識や技能を一方的に身につけさせることのみ埋没するのではなく、子ども一人一人を見据え、個性化された学習の中で、一人一人に確かな学力を育成する。

そのために、私たちは、指導理念や指導技術の共有化に努め、一人一人の子どもに応じた指導を進めていく。また、子どもと子ども、子どもと教職員の信頼関係に裏打ちされた「学びの共同体」作りに尽力していく。

### 2、人との関わりの中で、基本的な生活習慣や公共心を身につけさせる。

この数年間、掃除や給食指導をはじめ生活指導上の問題まで「当たり前のことをきちんとする」子どもを育てようという取り組みを進めてきた。この間様々な実証的研究により、生活習慣・規範意識と学力の間に高い相関関係があることが明らかになった。

そこで、今後も、「確かな学力と豊かな心」を身につけた子どもの育成をめざして、基本的な生活習慣や公共心をしっかりと身につけ、生活面でも真に自立した子どもを育てていく。そして、人との関わりの中で、自分自身を評価し、他者の評価を真摯に受け取め、よりよい自己を創り上げていこうとする子どもを育てていく。

### 3、保護者や幼稚園・中学校・高等学校・特別支援学校並びに地域・大学との連携を深める。

私たちのめざす教育は、小学校の教職員のみで実現できるものではない。よりよい教育は、学校と家庭、地域、他校、大学とのよりよい関係の中でつくられる。

そこで、本年度も本校の教育活動の成果や課題、改善の方向などを広く発信することで、理解を深め、積極的に建設的な協力関係を築き上げていく。また、保護者や地域、幼稚園、中学校、高等学校、特別支援学校、大学との連携を中心に、一人一人の健やかな成長を支えるという視点から「確かな学力と豊かな心」を育成できる理論と実践を明らかにし、様々な地域の教育実践に貢献できるようにする。

6 附属平野小学校の平成25年度 重点目標(評価項目)、具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	「ひとりで考え ひとと考え 最後までやりぬく子」
学校教育計画	1、確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程を編成し、実施するための研究活動の最適化 (①教育課程・学習指導、⑦組織運営、⑧研修、⑩施設・設備) 授業研究主題「学びを創り続ける子どもの育成」を追究する中で、学びを創り続ける授業のあり方を探る。 共同研究主題「ユニバーサルデザインにもとづいて「わかる力」「考える力」「使える力」を育む保育・授業づくり」を追究する中で、授業化の試みを集積する。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程を編成し、実施する (①教育課程・学習指導)	ア. 学びを創り続ける子どもの育成に資する授業における教師の役割について実践を通して提案する。	慶応義塾大学の鹿毛先生から継続的に指導を受けながら、「学びを創り続ける授業のあり方」の理論、および、各教科論と、それらに基づく授業実践、ならびに研究授業を実施した。 また、授業研究発表会を開催し実践提案を行なった。各教科領域等について指導助言や参会者からの意見を得たりシンポジウムで示唆を得たりすることができた。	特になし。	A	・本校は若い先生が多く、ベテランの先生が若い先生に伝えるような細かい視点が必要である。	A	来年度も引き続き、本校赴任1年目の指導者向きに、基本研修会を開催する。また、学年団内および研究教科内で個別に指導する。
	イ. 『ユニバーサルデザインにもとづいて「わかる力」「考える力」「使える力」を育む保育・授業づくり』を追究する中で、その授業化の試みを集積	小学校の研究活動部内共同研究担当が五校園の共同研究部長となり、五校園共同総論の執筆を担当した。学び合いとICT活用を2つの柱として、共同研究の推進と校内研修の企画運営を図り、校内で授業化を試み、そ	学び合いとICT活用について、校内研究の「学びを創り続ける子どもの育成」に向けた教師の役割との重なりを明らかにし、校内研究と共同研究が相乗的に深まるように、研修のあり方を改善する。	B	特になし。	B	

	する。	の過程を冊子にまとめた。					
(2) 確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程に基づく授業づくりの視点と方法を教員間で共有する。(⑧研修)	ア. 教科間で理論と実践を審議するグループ教科部会と外部から指導助言を得られる公開授業の機会を増やす。	各グループ教科部会のねらいと位置付けを明確にして2~3日間開催した。また、教科毎の公開授業(指定授業)を秋にも1教科1本開催し、研究発表会までに1人1授業以上を公開し、どの教員も外部の指導助言を受けた。	特になし。	A	特になし。	A	
	イ. Open-Café(地域貢献のための公開授業、および講習会)とInner-Café(校内基本研修のための校内授業)を開催する。	「研究プロジェクト会議」の3つのプロジェクトの一つである「Open-Cafeプロジェクト」を立ち上げ、Open-Cafeでは、7月と8月に2回開催した。全21授業を公開し、のべ200名近い若手教員・教職志望学生が参会した。また、Inner-Cafeについては、2週間で全22授業を校内公開することができた。	特になし。	A	特になし。	A	
(3) 確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程を編成できるように組織運営の最適化を図る。(⑦組織運営)	ア. 校務分掌の研究活動部の再編を図る。	研究活動本部について部内組織を再編した。研究活動全体のプロデュース、ICTと広報担当、校内授業研究2名、共同研究2名の分業制とし、それぞれの役割分担をより明確にした。各役割について高い水準で業務を遂行できた。	特になし。	A	特になし。	A	
	イ. 個々の職員の課題に対応した3段階の研究チームを設置し、課題解決を図る。	スクールリーダー育成のための「研究戦略会議」、ミドルリーダー育成のための「研究プロジェクト会議」、本校の教育を理解する「基本研修会」を月に1回のペースで開催する。	特になし。	A	特になし。	A	
(4) 確かな学力の育成に資するバランス	ア. ICT教育環境の整備のために、児童用タブ	全ての教員が、タブレット端末を活用した授業実践や校務の情報化に取	特になし。	A	・教室での授業は、もう少し板書を大切にすることがあ	A	板書と電子黒板の組み合わせについて、双方のよさが相乗的

<p>のよい教育課程の実施のための施設・設備の最適化を図る。(⑩施設・設備)</p>	<p>レット、指導者用タブレットの整備を図る。</p>	<p>り組むことができた。タブレット端末をより有機的に活用するためのICTインフラを整備することができた。</p>		<p>る。</p>	<p>に発揮されるようなあり方を開発していく。</p>
--	-----------------------------	---	--	-----------	-----------------------------

学校教育目標	「ひとりで考え ひとと考え 最後までやりぬく子」
学校教育計画	2、登下校指導、および、人間関係づくりなどの教育活動の最適化を図る。(②生徒指導、③進路指導、④安全管理、⑤保健管理) 共同的な活動を通して得られる、感動や達成感を感じられるような教育活動の場の設定を工夫していくためにも、クラス間、学年間の意見交流を日常的に行えるようにする。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)学校生活上のルール、マナー、健康安全を、職員と児童で共通理解し、その徹底を図る。(④安全管理・⑤保健管理)	ア. 全校朝会や学年朝会、通学班指導などの時間を通じて、登下校中の安全に関する児童の意識を高める。	全校朝会で登下校のマナー・安全について、副校長と生活指導部長などが継続的に指導している。また、PTAの登下校巡視に加え、下校ボランティアとして下校時の安全確保体制を強化し、ルール・マナー面での指導の充実を図った。	校内での情報共有をこまめに、迅速に行える体制を整える。 また、保護者・地域と連携して登下校時の安全確保、マナー向上に取り組めるよう、指導体制を強化する。	B	特になし。	B	
	イ. 委員会活動等を通して、児童自らが学校生活でのルール・マナーの改善に取り組めるよう、教員が支援する。	各委員会がそれぞれの委員会の役割に合わせて、活動内容を考え、一定程度取り組みを進めることができた。	委員会相互の連携を図って、子ども自身が気付いた問題、教員が提起した問題について、解決策をそれぞれの役割に応じて考えられるようにする。	B	特になし。	A	
(2)人間関係づくりに向けて、自他の尊重や学び合いの精神の向上に取り組む。(②生徒指導・③進路指導)	ア. 子ども・保護者とのコミュニケーションを大切に、子ども一人ひとりへの細やかな配慮と、保護者との密な相談・連絡を行う。	「誰がやったのか」「きまりだから守りなさい」という指導ではなく、「なぜそんな気持ちになったのか」「なぜ、そのきまりがあるのか」を互いに考えさせる指導を繰り返すことが比較的多くなっている。	現象としてあらわる言動について、表面的な指導ではなく、根本にどんな問題が潜んでいるのかに教員自身が思いを馳せ、子どもが自らの内面を見つめられるような指導について機会をとらえて考え合うようにする。	B	・宿題のチェック中でも子どもから話しかけられたら教師が子どもの方を向いて話を聞くことで、子どもは聞いてもらえているという安心感を感じることができる。	B	
	イ. Q-U調査結果の活用について研修会を2回実施し、教員相互の意見交換などにより、学級経営の改善を図る	Q-U結果の活用について、1回目調査後と2回目調査後に研修会を開催した。学級経営について成果と課題を明らかにしながら取り組むことができた	Q-U調査内の学習意欲に関わる項目を授業評価に活かし、Q-U調査を日常の授業づくりにもいかすようにする。	B	特になし。	B	

学校教育目標	「ひとりで考え ひとと考え 最後までやりぬく子」
学校教育計画	3、PTA活動、および、平野地域との連携の最適化を図る。(⑨保護者、地域住民との連携) PTAサークル活動の新しいサークルの可能性を探りつつ、サークル活動を通して平野地域との連携を図る。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) PTAサークル活動 の新たな可能性を探る。 (⑨保護者)	ア. 「わくわくイベント」 を五校園連合の行事とし て位置付け、小学校PT Aサークル活動と他校園 の連携を図る。	・10月開催の「わくわくイベント」 では、特別支援学校、幼稚園、中学 校、高等学校からそれぞれブースが 出され、また、大学より「やまお と「たまごどり」が来校し、子ども 対象のイベントを開催しつつ五校園 のPTA・振興会・後援会の連携が図ら れた。	特になし。	A	五校園の連携が深まる行事 となった。	A	
	イ. 学校教育活動を環境 整備等の側面から間接的 に支えるPTAサークル活 動の活性化に取り組む。	・A一昨年度立ち上がった、平日に参 画しづらい保護者による休日の教育 支援サークル「AKP24」は、校内の環 境整備や子どもへの体験イベントな ど、学校からの要請にも応じてもら いながら、活発に活動を進めていた だくことができた。	・AKP24については、学校からの 要請によって活動内容を決めて もらうために、実行委員会の直轄 組織としている。サークル紹介等 で、そうした経緯をさらに周知す る。		B	特になし。	B
(2) PTAと平野地域保 護者との共同的な活動に 取り組む、(⑨地域住民等 との連携)	ア. PTA活動における 学校と保護者の共同的な 活動の計画・実施に取り 組む。	・「附小周辺クリーンキャンペーン」 で学校周辺の清掃活動に取り組ん で5年、地域に定番行事として意 識されている。AKP24による学校周 辺の落ち葉拾いなどの活動も地域 から高い評価を得られている。 ・インドアスポーツでは、地域の公 立小学校とバレーボールの親善試 合を行うなど、スポーツの交流が 活発に行われた	特になし。	A	特になし。	A	